



# さんぐりあ

名古屋NGOセンターの主な活動

- ① 地域及び全国的NGOのネットワーク作り
- ② NGOスタッフやボランティアのためのセミナー実施
- ③ 一般市民へのNGO情報の発信
- ④ 地球市民教育のためのセミナー、フォーラム等の実施
- ⑤ 自治体、及び関係機関への提言・協力活動

さんぐりあとは、赤ワインにいろいろな果実を漬け込んでつくる飲み物です。  
これを世界にたとえ、さまざまな果実(人々)の個性を損なわず、素晴らしいハーモニーが奏でられるようにと願いを込めて、名付けられました。



〈写真上〉

非営利団体 Global Empowerment Missionの倉庫へウクライナに運ぶための食料を寄贈する浅野さん。ポーランド ジェシュフにて。

〈写真下〉

ウクライナ ジトームル州ジトームル市 2022年3月4日8時に、ロシア軍に爆撃された第25番学校。取り壊しになるため、教師、卒業生などが参加して「最後の授業のベル」を鳴らす「お別れ会」。(ジトームル・インフォより 2022年5月11日)



特集

## 外国人を支援するということ 「避難民」と難民

2022年2月24日に突如として始まった、ロシアによるウクライナへの侵攻。今号では、政府がその後使い始めた「避難民」という言葉と、それによって隠されようとしている難民問題について考えてみた。

# 外国人を支援するということ 「避難民」と難民



今年2月、ロシアがウクライナへの軍事侵攻を開始したという報道が流れると、首相はすぐさまウクライナ避難民の受け入れを表明した。3月の初めには最初の避難民が来日し、9月28日現在では1,879人※の避難民が日本で暮らしている。ロシア侵攻を受けてウクライナから避難してきた人々には、日本財団や各自治体へ寄せられた寄付金を利用した支援があり、日本語教育や就職などへの配慮もされている。ここ最近では関心が薄らいできているとはいえ、ウクライナでの戦況と共に避難民の日本での暮らしぶりも新聞やテレビで取り上げられることで、注目もされてきた。

その一方で、ミャンマーやアフガニスタン、あるいはクルド人、アフリカなどから自国で暮らすことに危機感を覚えて来日

した人々は、難民申請をしても受理されないまま、不安な状態で生活している人も多い。

祖国で暮らせるものであれば暮らしたい。けれど、国外に出なければ生きていくこともままならないような人々という点ではどの国から逃れてきた人も同じであるはずだ。自分の祖国を逃れてきた人々に私たちができることはいったい、どんなことなんだろう。

『チェルノブイリ救援・中部』で30年以上ウクライナのチェルノブイリ原発事故被災者の支援活動をされてきた戸村京子さん、外国人支援について様々な角度で取り組んでおられる神田すみれさんにお話をうかがった。

※出国済みの者等がいるためウクライナ避難民入国者数とは数値が一致しない。

## チェルノブイリ救援・中部のこれまでの活動

1986年のチェルノブイリ(現ウクライナ北西部)原発事故から4年目に発足しています。当時はまだソビエト連邦の時代で、現地の状況の詳細についてはほとんど隠蔽されていましたが、ほぼヨーロッパ全域から8,000キロ離れた日本まで放射能汚染されていたことがわかっています。私自身は1995年に初めて現地を訪れ、現地の人たちとの交流を続けてきました。その後キエフ大学、外務省の研修プログラムでウクライナに長期滞在したこともあり、現在のウクライナとロシアの状況は本当に心が痛みます。

原発事故による放射能汚染地にも何度も行っています。そこで暮らす人々は、放射能に汚染されている地域だとわかっていながら、「でも、私たちはここで生きていくしかない」と言っています。そこでできた野菜を食べ、そこで育てられている家畜の肉や牛乳を食しています。私も線量が気になって最初は口にするのにためらいを感じましたが、食べてみるとおいしい。生きていくということはこういうことなんだなと感じました。

ジトーミル州ブルシロフ地区プリヴォローチェ村※の診療所にて(2015年)

※チェルノブイリ事故被災地からの避難住民を受け入れた「移住者の村」



## 戦争が始まって

ウクライナの人々は、今回の戦争は、東部での紛争、ロシアによるクリミア侵略の2014年から始まっていると認識しています。首都キーウや地方の街中でも、戦死した多くの若者たちの写真が掲げられています。緊張感のある生活の中でも、ここが自分達の国、ここで生きていくという自分たちの生活が続けられていたのです。それがこの2月で一変しました。現地から状況を知らせる写真が送られてきます。私たちが支援していた学校にも爆撃がありました。避難せざるを得ない状況になっているのです。

私たちはまず何とかして支援物資を届けなくてはいけない

と思い、寄付金を募り資金調達をし、どんなルートでなら物資を安全に届けることができるのかと、現地のカウンターパート(慈善基金団体)と何度も連絡を取りました。ドイツのチェルノブイリ被災者支援を行う協力団体に送金して救援物資を調達、ポーランド経由でのルートを確認し、活動現地から国境まで受け取りに行き、医療物資や災害救助機材などを送りました。

## 避難民と難民

日本でも政府がウクライナ避難民の受け入れを表明し、名古屋市もいち早く避難民の受け入れを表明、募金活動を行いました。名古屋にある日本ウクライナ文化協会、外国人支援団体を中心にウクライナ避難民受け入れのためのネットワーク「あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク」発足にも関わり、現在に至っています。

ただ、多くの外国人支援者の中からは、ウクライナだけでいいのかという声が上がっているので、活動当初からメンバーの間で、ウクライナ避難者支援と共に日本にいる多くの難民にも目が向けられ、難民認定が進むようにと願っています。

(戸村京子さん 談)



取材した当日(7月22日)は、レスキューストックヤードが運営する「あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク」によるウクライナ避難民の日本語教室が隣の会議室で行われていました。その横の部屋では、幼い子どもたちがボランティアさんと遊ぶ姿も見られました。写真は洋服、日用品などの支援物資が整理して置かれた壁一面のスチール棚の前に立つ戸村さん。

(担当:貝谷)

## 難民? 避難民? どちらがう

ウクライナ紛争以降、多くのウクライナ人が「避難民」として日本に入国している。2022年9月28日現在の時点ではその人数は1,961人となっている。(出入国在留管理庁のH.P.による)その難民の多さでは、第二次世界大戦以降最大となったシリア難民が約570万人だとされるが、UNHCRの情報では1000万人以上のウクライナ人が国外に脱出しているという。その大部分は近隣の東欧諸国に逃れている。

一方で、日本は従来から難民認定のハードルが高く、毎年の難民認定数は100人を大きく下回ってきた。日本での難民認定率は、最も多い2021年でも0.7%(74人)だが、カナダでは62%、英国では63%となっている。さらに難民認定されるまでの年数が非常に長く、場合によっては4年以上もかかるという。その状況の中で今回のウクライナ人への対応が「難民」ではなく「避難民」とされ、特例的な措置が取られていることに批判が集まっている。

では、「難民」と「避難民」とはどのように違うのだろうか。まず「難民」の場合は1951年の難民条約の規定により、「人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属するという理由で、自国にいと迫害を受けるおそれがあるために他国に逃れ、国際的保護を必要とする人々」と定義されている。日本で難民認定されるためには①有効な

パスポートを所持している、②迫害を受けた、あるいは受ける可能性があることが証明できる、③日本に身元引受人がいる、という条件をクリアしなければならない。いったん難民と認定されれば、日本での在留資格が与えられ、日本人とほぼ同様に福祉や教育が受けられるし、年金の受給資格も与えられ仕事をすることもできる。

それではウクライナ「避難民」の場合はどうか。まず「避難民」とは法的な定義づけがない緊急避難的な特例である。しかし、実際には彼らには在留資格が与えられ「特別活動」の枠組みで就労も可能だし、国民健康保険への加入や就学年齢の子どもは通学も保障されている。「避難民」の場合にも、就労や教育の際に日本語会話力の問題で非常に苦労している点は「難民」認定された人々と同様に課題となっている。

日本における「難民」受け入れの極端な厳しさの背景には、「移民」は受け入れないとする現在の政府方針の影響があるだろう。しかし現実には、すでに多くの外国人労働者が日本で生活している。日本人労働者に対しても十分に労働基準法が遵守されていない中で、彼らはさらに劣悪な環境にある。ウクライナ「避難民」もやがてこの問題に直面するに違いない。日本人であれ外国人であれ、人を大切にするという基本的な価値観が問われている。(担当:内藤)

# アフガニスタンの難民にも支援を

## ウクライナ支援で高まる意識

困りごとがある外国人の相談のついでに伴走する。個人ベースでそんな活動をしています。以前は外国の方から直接相談を受けることが多かったのですが、最近は自治体や保健師、学校の先生等から「こういう人がいるがどうしたらいいか」と相談を受けるようになりました。

ウクライナで戦争が起きてから、多くの避難民の方が日本に来ています。避難民の方、身元引受人、受け入れ自治体を訪問して、ウクライナの方がどんなことに困っているか聞いて対応しています。若い方が日本の同世代の人と交流をしたいという声があったので非常勤講師をしている大学で学生と一緒に交流をしながらキャンパスツアーをしたり、日本の小学校に入学した子どもの母親から、母語を忘れてほしくないという思いを聞き、母語保持に関する研究をしている友人からアドバイスをもらう場を設定したりしています。

また、外国人支援、多文化共生に取り組んできた団体は、避難者支援をしたことがないので心のケアをどのようにしたらいいのかわからないという相

談がある一方で、被災者支援に取り組んでいる団体は外国人の支援の経験がありません。心のケアについては、愛知県臨床心理士会から何かできませんかと申し出があったので、オンラインで支援をしている人たちが相談できる場を作りました。ウクライナからの避難民を支援したいという人はたくさんおり、その想いを必要なところへおつなぎできたらと思っています。

## アフガニスタン難民の実情

ウクライナ以外の難民についても支援が必要です。アフガニスタンは何十年も内戦が続いており、多くの難民が日本にも来ています。医師や弁護士などの方も日本に来るのですが、日本ではそういった仕事ができないので、キャリアが積めない、人生の空白期間だと絶望する難民もいます。ウクライナは食糧という資源があるから日本をはじめとする先進国が支援をしていますが、アフガニスタンは石油やレアメタルなどの資源がないので先進国から見放されています。自分の未来がみえない、人生設計ができない、世界は見えて見ぬふり、我々は世界の生贄だという言葉も聞きました。



支援物資の分配作業

そして、昨年8月にアメリカが支援していた政権がタリバンによって崩壊して首都カブールが陥落しました。その際、多くの政府関係者やアメリカに近い立場の方が、タリバンによる迫害を恐れて外国に退避しました。日本には800人余りが退避しましたが、そのうち約60名が愛知県に避難しています。ウクライナの戦争のためか、難民に対する市民の意識が高まっています。ウクライナからの避難者に自転車を提供したいという方にアフガニスタンの実情を説明すると、こころよくアフガニスタンの難民に自転車を提供していただきました。

(多文化ソーシャルワーカー  
神田すみれさん談)

(担当:丹羽)

## 本の紹介 中学生から知りたいウクライナのこと

ウクライナに対するロシア侵攻が始まった直後の3月に行われたミシマ社主催のオンラインイベントでの講義を中心に編集されている。ポーランド史専門の小山氏が客観的にウクライナという国の歩みを述べ、食と農の現代史専門の藤原氏は、ロシアのウクライナ侵攻をよそごとのように考えてはいけないと警鐘を鳴らす。ウクライナの歴史を眺めることで、この国がロシアにとってどのような「地域」であるのかが見えてくる。地続きにある国同士の「国境」というのは、島国の日本人的な感覚では捉えられないものがある。この機会に両国の関係をきっちり学び、本当の意味で我がことに置き換えてこれからの日本という国のあり方を改めて考え直したいと思わせてくれる一冊。小山氏が最後にウクライナについての読書案内もされているので、さらに学びを深められそう。



小山哲・藤原辰史 著  
ミシマ社刊 1,760円  
2022年

(担当:貝谷)

「人間に生まれてきて、よかった  
許すこと助けることができるから」

この詩は、去年3月6日名古屋入管で亡くなったスリランカ人女性ウイシュマ・サンダマリさん(享年33歳)から私に送られてきた手紙の一節です。

祖国のスリランカ大学を卒業し、インターナショナルスクールで日本の子供たちに英語を教えたのがきっかけで、日本語や日本の文化に憧れるようになったそうです。大学への進学率が15%というなかで、向学心に燃えていたウイシュマは日本への留学そして、スリランカに語学学校を開きたいという大きな夢をもっていました。最初は留学に反対だった母親のシリヤラタさんも、「日本は安全で平和な国だから」という説得にいつしかそれは自分の夢になり、家族そろって日本に送り出したのでした。

彼女の死を始めは信じられなかった家族が日本で目にしたのは残酷な入管の現実でした。ウイシュマがあれほど憧れ愛した日本でこのような最期を迎えたこ

エッセイ  
NGOの  
散歩道  
第36回

ウイシュマの願い

とは母親にとってどうい受け入れがたいことでした。日にちがたとうと悲しみは常に新たに湧きあがり尽きない苦しみと嘆きに涙が止まらない日々が続いています。私にとっても今も彼女の話を語ろうとするとき、「なんとかできなかつたのか」という

自責の念がこみ上げ冷静になることはとても難しいのです。3月6日はいつまでも過去にならないのです。

ウイシュマを失った今、私にできることは、彼女の死を決してなきものにしないことです。

ウイシュマのように「人間に生まれてきてよかった。許すこと助けることができるから」という気持ちには今はまだなれません。でも地に落ちた一粒の麦が芽を出すように、ウイシュマの命は多くの人たちに入管の現実気づかせ、人々は声を上げ行動を起こしています。彼女が願った社会がこの中から生まれてくることを信じています。

シンガーソングライター、シェルター管理者 眞野 明美

さんぐりあ編集委員がおすすめするモノ・ヒト・メディア情報

NANGOC RECOMMENDS

なんごく

りこめんず

vol.74

このコーナーでは皆様からの「りこめんず」を募集しています。NGOに関するあらゆる「おすすめもの」情報をおよせください。e-mail:info@nangoc.org ※「NANGOC」とはNAGoya NGO Centerの略です。

BOOK 女の子がいる場所は  
やまじえびね 著

貝谷京子の  
オススメ

去年還暦を迎えた私は、中学生のころ「女の子らしさ」というものに反発していた。そして、青い色のバッグを買ってきたときに母に「なんで赤いのにしないの」と言われたことを覚えている。とはいえ、「りぼん」とか「なかよし」といった少女漫画雑誌を楽しく読んでいたのも事実。60年以上女として生きてきて、さまざまなかまはありはあるとはいえ、中学生の頃に「なんで?」と思っていたことをそんなもんだよねと思うようにもなった。

最近ほとんど疎かった漫画の世界だったけれど、書店の原画展で見かけて即買したコミック。サウジアラビア・モロッコ・インド・日本・アフガニスタンそれぞれの国で、「女の子」として生きることに関々としている10歳の女の子のお話は、それぞれの国の背景も見られて興味深く読めた。男の子には男の子の「悶々」があるのだろうけれど。



KADOKAWA刊 2022年  
814円+税

SPOT 白亜のビルマ(ミャンマー)式  
仏塔「ミッタディカパゴダ」

中島正人の  
オススメ

JR関西本線の春田駅から北へ2キロ近く、田園の向こうの住宅地に突然現れる白亜の美しい仏塔「ミッタディカパゴダ」。名古屋市市中川区にあるこの本格的なビルマ式の小さな仏塔は、その完成から7年目を迎えた。

この仏塔の脇には、東海三県を中心に周辺に住むビルマの人々の交流・宿泊施設も併設されている。毎月開かれている運営会議の様子を見学する機会があった。敷地内の除草や掃除などの話題もあったが、中心の話題は10月の満月の日の祭り「ダディンジュ(灯明祭り)」のことだった。その中心にいたのは、同じ中川区にある妙本寺の住職、馬島浄圭さん。彼女こそが、この地にこの仏塔が建つに至った中心を担った人。30年以上にわたって、ビルマの人々の苦難と仏教への篤い信仰に寄り添ってきた。

週末にもなれば、故国を遠く離れて暮らす人々が、ここに集い、この仏塔に鎮座する白亜の仏像に祈りを捧げている。



馬島浄圭さん



名古屋市中川区新家2丁目

# Nたまのいま

No.46



あさの ようこ

Nたま6期生 浅野 陽子さん

名古屋NGOセンターが主催する、将来のNGOスタッフを育成する“次世代のNGOを育てるコミュニティカレッジ”（通称Nたま）。2002～2021年度までの18回で（2004年、2020年度はお休み）、研修を受けた方は264名。のべ145名の修了生がNGO・NPOスタッフの担い手として羽ばたきました。

約半年間の研修を終えた卒業生たちは、今どこで、どんな活動をしているのでしょうか？第46回はNたま6期生、浅野陽子さんにお話を伺いました。

## ペルーでの出来事から、世界の課題を考える道へ

### ■Nたまに参加したきっかけは？

友人の結婚式に参加するため訪れたペルーでの出来事がきっかけでした。友達になれたであろう出会いがあったのに、経済的格差のために人と人とのつながりが崩れてしまうという体験に、世界はこのままで良いのか、放置していいのではないかと強く思っていた所、Nたまのチラシに出会い、参加することを決めました。

### ■Nたま講座で印象に残ったことは？

印象に残っていることは、高山研修で見た地元で躍動する若者の姿でした。

研修では上宝村（当時）のまんま農場という所を訪れました。その地域は高齢化もあり耕作放棄地が問題になっていました。土地の所有者の方も自分が畑や田んぼを耕せないことで草が生えたりなど、周りに迷惑をかけてしまうことを気に病まれている状態でした。そこで、地域の若者グループが農業法人（まんま農場）を立ち上げ、高齢農家の耕作放棄地を手入れする代わりに無料で借り受け、お米を作り、それを販売するという新しい農業の試みをされていました。

過疎地において若者が流出してしまうのはよく耳にすることです。ですが、それを食い止め、さらに地域を盛り上げたいと活動する若者もいるという事実と、エネルギーに挑戦されている姿にと

ても希望を感じ、刺激を受けたことを覚えています。

### ■現在の主な活動は？

現在は、NGOである「ハンガーゼロ（日本国際飢餓対策機構）」の職員となって13年目です。主に海外事業部の業務を担当しており、アフリカやアジア、中南米など海外の現地パートナーとコミュニケーションを取り、現地での活動をサポートする役割を担っています。現地での事業内容は、飢餓や貧困に苦しむ地域の人たちが、自主的かつ持続的にコミュニティ開発を行っていくことができるように、若者や女性など様々なリーダーの育成、住民同士の繋がり強化、収入向上活動のサポート、行政との連携の強化など多岐にわたります。

約20ヶ国で行われているそのような取り組みについて、学校講演やイベント出展などを通して多くの方々に知って頂くための啓発活動も担っています。また、名古屋NGOセンターの加盟団体として、Nたまインターンの受け入れも毎年行っています。

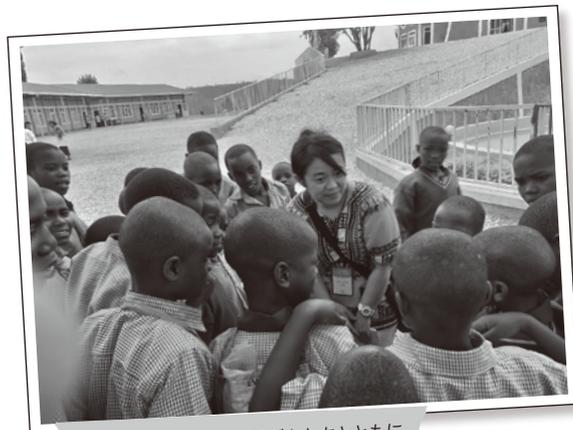
災害発生時には、緊急援助も活動の大きな柱であり、先日は、ウクライナの難民緊急支援のため隣国のポーラ

ンドへ赴いていました。

そこではウクライナ各地から逃れてきた方々のお話を聞く機会がありましたが、現地では物資の支援は比較的コミットしている状態に対し、心のケアが圧倒的に足りていないと感じました。

私が訪問した時期は、戦争勃発当初の混乱した緊張状態から少し時間が経過し、新たな課題が明確化し始めている時でした。現地の方の精神的負担は大きく、慣れた土地から何ヶ月も離れ、家族と会えない、しかもこれがいつまで続くかわからないという通常でない状態に置かれた人達の苦しみを目の当たりにしました。

現地では、今後の支援の形を探るための調査を主としていたこともあり、これらの課題に対し、何ができるか模索していきたいと思っています。



2019年 ルワンダの子どもたちとともに

(担当: 飛田)

# センターの動き

## 人材・活動育成

### Nたま19期生はじまりました！

7月23日人権啓発センターソレイユプラザでNたま(NGOスタッフになりたい人のためのコミュニティ・カレッジ)の入学式を行いました。昨年はオンラインでの研修を取り入れましたが、今年是对面で開催しています。

研修生は10名、多様な所属と様々な年代の方が集まりました。例年に比べ学生が多いのも特徴です。

入学式では、研修生それぞれがNたま半年間での目標をつくり、互いに応援メッセージを送り合いました。8月6日には、池住義憲いけずみよしのりさんを講師に迎え「NGOはなぜあるのか」をテーマにお話いただき、NGOの特徴や活動で大切にすべき価値観を学びました。8月27・28日には、アジア保健研修所(AHI)を訪問し、オンラインで南インドのNGOワーカーとつなぎ活動やインドの人々の暮らしを聞き、開発途上国の課題を参加型で考えました。

コロナ禍ということで、対面での開催とはいえ、研修が制限されることもあります。しかし、研修生はお互いからの学び合いによって、多くの気づきを得ています。これからの研修で19期生が何を感じ、Nたまの学びをどう活かしていくのか楽しみです。



インドの貧困問題の問題分析をする

(報告:田口)

## 政策提言

### 政策提言委員会報告 —ODA政策協議会と開発協力大綱改定の動き—

名古屋NGOセンターは、NGOと外務省との政策対話の場であるODA政策協議会にコーディネーターとして2名の政策提言委員が参加し、この2名が同協議会のNGO側事務局を務めています。

ODA政策協議会はこの3年ほど荒波に揉まれていました。2019年度第3回がコロナ禍により中止となった後、NGO側の事務局機能が行き詰まり、20年度は協議会本来の形をとれず、臨時の意見交換会に終わりました。

21年春に始まった事務局機能立直しの議論を経て、その秋、ODA政策対話に関心のあるNGO関係者が集まり、政策対話の意義や事務局機能等について議論しました。こうして名古屋NGOセンターが事務局を担うこととなり、本年3月、2年ぶりに本来の形で21年度のODA政策協議会を開きました。22年度は7月20日に、第1回ODA政策協議会を開催しました。

ODA政策を巡っては開発協力大綱改定の動きが急です。改定のプロセスが市民に開かれるか、非軍事の原則が後退しないか等の懸念があります。第1回協議会でNGO側が質問をしましたが、外務省は「まだ決まっていない」と回答するにとどまりました。

しかし間もなく、外務省は有識者懇談会のNGO側委員を推薦するよう求めて来ました。急遽、ODA政策協議会コーディネーターと連携推進委員とで対応しました。NGO側委員1名を推薦し、透明性と公開性の担保と、実効性のある提言を行うための助言グループを組織し、NGO側委員を支える態勢を整えました。

「ビジネスと人権」「ジェンダー平等」「市民参画」「国益ではなく人道」等がNGO側の追求したい理念です。開発協力大綱改定の動きはこれから急展開します。目を離さずにください。

(報告:政策提言委員 西井)

## 活動報告カレンダー — 2022年3月1日～2022年7月31日

- ネットワークング ・シーテック クリック募金2022開始
- コンサルティング
  - ・NGO相談(外務省NGO相談員):3~7月 407件、出張相談(6/7@愛知大学)、第1回外務省NGO相談員連絡会議(6/24)
- 情報収集・発信
  - ・会報『さんぐりあ』5月号発行(1,000部)・発行(4/15)
  - (3/17,4/21,28,5/12,19,26,6/2,9,16,23,30,7/7,15,21,28,8/5,18,25)

情報発信		3月~7月
ホームページ	センターからのお知らせ更新回数	14
	中部NGO情報ひろば更新回数	26
facebook(フォロワー数1,345人)	更新回数	62
メルマガ(登録数256人)	配信回数	25

- 政策提言
  - ・東海市民社会ネットワーク総会&記念イベント参加(6/4)
  - ・ODA政策協議会参加(3/24,7/20)
- 人材・活動育成
  - ・NGOスタッフになりたい人のためのコミュニティ・カレッジ2022(Nたま) 説明会(6/18,22,26) 入学式(7/23)
  - ・チェルノブイリ救援・中部主催「チェルノブイリ救援・中部 30周年記念講演会」のオンラインサポート実施(3/13)
  - ・あいち国際理解教育ステーション(AIS)主催「『子どもが働くて?』オンラインワークショップ」のオンラインサポート実施(3/26)
- 運営
  - ・理事会(4/19,5/21,7/26)
  - ・職員会議(3/8,4/5,5/10,31,6/14,28,7/12)

●賛助会員(個人)

【更新(賛助会員A)】

大川元嗣、佐藤遼、高木雅成、神田すみれ、小池康弘、林滋、原田篤実、鉄井宣人、加茂省三、山田隆円、松本恭一、近藤公彦、斉藤尚文、福田美津枝、中島正人、横山紀子、谷川毅、龍田成人、廣井修平、清水淳、矢内淳、藤井典夫、名嶋聰郎、桃井義博、山本卓也、平野木恵、平尾秀夫、蟹江舟美、堀田妙子、中島正、裏見登志子、加賀美薫、鷺見三恵子、三田禮子、加藤信一、岩田崇、吉川典子、岡田雅宏、石井りか

【更新(賛助会員B)】

中島隆宏、佐藤都喜子、吉田英一、松尾朋之、久野博司、竹内智子、谷口千賀子、山岡要子、藤村昭子、高田信英、水谷洋子、池山(高野) 葉、中垣貴裕

【新規会員】

宮澤佑実、林理香、武藤由師、村田直美、山崎光貴、水谷百花、塩田真也、大塚雅江

●寄付者(物品なども含みます)

【一般寄付など】

小池康弘、加藤信一、日本チャリティーマラソン大会実行委員会、丹羽輝明、八木巖、渡辺祐樹

【東海ろうきんNPO寄付システム】

伊藤武士、宇野菊夫、大島京子、加藤勝子、大野博人、後藤文昭、酒井俊輝、水野愛、目加田貴弘、山田志帆、松下和哉、土肥和則、八木巖、中島正人

【Nたまサポーター】

八木巖、塩田匠弥、春田みな美、松浦史典、栗田佳典、原田篤実、村上沙智代、大須賀恵子、加藤里紗、中島正人、神谷周作、西田文乃、木村容子、貝谷京子、小久保紀子、高橋美和子、水谷洋子、林滋、黒田朱里、鉄井宣人、林かぐみ、田中幸男、岩原明彦、廣井修平、松本恭一、中尾さゆり、ポラNPO塾、近田千波、岩田崇、石井りか、中島隆宏、山崎唯司、関口威人、岡谷鋼機株式会社、連合愛知

【外貨】滝栄一、チェルノブイリ救援・中部

●アフィリエイト

アマゾン・ヤフー186円/楽天60ポイント

みなさまの  
ご理解・ご協力に  
心より感謝  
申し上げます



1954～2022

Leading the world with trust

企画展

JICA's ROAD

2022.9.8 THU - 12.18 SUN

10:00 - 17:00

JICA中部なごや地球ひろば

& パネル展

世界一高いところへ

LOOK SOUTHWEST ASIA!

アクセス：名古屋駅から徒歩13分/名駅・ささしま  
開館：10:00～17:00 休館日：月曜・年末年始  
(祝日の場合は閉館、翌平日が休館)  
※最新の開催情報はウェブサイトをご覧ください。

**事務局のひとこと**

今年6月は職員5人体制だったので、3人体制は寂しいです。でもシェアオフィスのため、加盟団体の職員さんが同じ空間にいらっしゃるので心強いです。職員数の少ないNGOにはシェアオフィスがオススメですね。(坂井)

**編集後記**

今回、初めてさんぐりあの編集に関わらせて頂きました。Nたま18期生の飛田と申します。Nたま生の時分から見る機会があったさんぐりあ。活動する中で、新たに得た知識や分野、また編集委員の方々とお会いしたことなど、とても貴重な体験をいただきました。(飛田)

9月10日(土)午後1時からNHKのEテレビで放映された『外国人困窮者に寄り添い差別と闘う』という番組を見ました。北関東のカトリック聖職者の方の奮闘を取材したものでした。仮放免状態の外国人の方々などの窮状が紹介されました。なぜ、日本政府はここまで彼らを放置して平気なのか、公的な救済が必要だと痛感しました。(内藤)

**ミャンマー、アフガニスタンより続々入荷中～!**

作り手のみえる品々をぜひ見に来てください♪

最新情報はSNSにて!

顔のみえる店～FAIR TRADE 風's (ふ～ず)

〒461-0015 名古屋市東区東片端町49  
正文館書店本店2F  
TEL&FAX : 052-932-7373  
MAIL : huzu.fairtrade2@gmail.com

発行：特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター  
会報編集委員：市川隆之、中島正人、貝谷京子、内藤裕子、丹羽輝明、村山佳江  
協力者：廣井修平、飛田真由子  
レイアウト：久由紀枝  
発行日：2022年10月18日  
印刷：山本印刷有限会社

特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター  
〒460-0004 名古屋市中区新栄町2丁目3番地 YWCAビル7F  
TEL&FAX: 052-228-8109 URL: <http://www.nangoc.org>  
E-Mail(代表): [info@nangoc.org](mailto:info@nangoc.org)

会費・寄付は以下よりお願いいたします。  
①クレジットカード <https://nangoc.org/support/>  
②郵便振替 (口座番号) 00860-5-90855 (口座名) 特定非営利活動法人名古屋NGOセンター